

表題を見て「海街 diary」的な展開を想像したあなたは、はずれです。期待外れの内容と思われるので、そのまま次の「画像診断と病理」のページへお進み下さい。

うちには2人の女子高生と、2匹のチワワがいる。チワワは4歳と2歳の雌で、年長者は母親、年少者はその子供らしい。もともとうちにはやはりチワワの雄が1匹いたのだが、彼は晩年、僧帽弁狭窄による心不全で8歳の若さで亡くなった。うちに来たのは生まれて3か月くらいで、ペットショップで購入し、それからというものの家族全員で可愛がった。当初病気に気付かなかったため、石垣島、沖縄本島に家族で旅行する際にも必ず連れて行って、飛行機では別室のため目的地の空港で引き取る際には、ケージに引いていたシートは爪で破かれ、ぼろぼろなのが常だった。今思えばそれらのストレスが彼の死を早めたかもしれないが、僕らにとっても彼にとっても貴重な思い出だったと思いたい。彼の死後、妻は犬は買わないと宣言し、僕らはそれに従った。

その後1年ほど過ぎてから、急に妻が“再度犬を飼いたい、しかしその犬は動物保護施設から引き取りたい”という。当時漠然と、

施設に保護された動物は一定の期間の後、処分つまり殺されることは知っていたが、いざどうすれば保護動物を引き取れるのか知らなかった。妻はいろいろ調べた末に、ある非営利団体の里親募集会に僕たちを引き連れて

いった。そこで僕らは彼女らに出会ったのだが、スタッフの話では親子とのこと。僕らもそのスタッフさん達も彼女らを引き離すのに抵抗を感じ、結局2匹一緒に引き取ることにした。結果うちは女子5人、男子は僕一人となった。多頭飼い(人も含めて?)は大変と思われる方も多いと思うが、いざ飼ってみると1頭飼いの倍の労力は必要とせず、親子および姉妹とはいえ、それぞれの異なった個性を感じてほのほのとする毎日である。しかし僕の帰宅時にワンワン吠えるのは、先代のチワワと同じで何で慣れないのか、飼い主のしつけがなっていないから

なのか? もしこれからさらにペットを増やすことがあっても、やはり保護施設・団体から引き取るだろうと思っている。このような団体や動物のことを多くの方に知っていただき、少しでも処分される動物が減ることを願っている。

うちの4姉妹



阿部 修

東京大学大学院医学系研究科生体物理医学専攻
放射線医学講座放射線診断学専攻分野